

第2章 「写真は語りかける」（講演録）

林田 光弘

私からは「写真は語りかける」というタイトルで、現在、長崎大学核兵器廃絶研究センター（以下、RECN A）が国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館（以下、長崎祈念館）と共同事業として進めております「被爆の実相の伝承」のオンライン化・デジタル化事業（以下、共同事業）についてお話ししたいと思います。

1 事業概要と背景について

被爆者の高齢化とコロナ禍の影響

二〇二二年、被爆者の平均年齢は八四歳を超えました。また、ここ数年はコロナ禍によっ

て証言など活動の機会が減少し、被爆者の活動は互助的な役割も果たしていたこともあり、厳しい状況が続いています。

被爆者の高齢化は様々な面で課題と言えますが、それは研究分野においても同様です。例えば、近年国際的に注目されている軍縮とジェンダーの視点で被爆体験を見つめ直すようになった際には、既存の証言等の資料に加え、ジェンダーに関する専門家の視点から被爆体験を聞き直すことも重要になります。

もう一つ、高齢化によって一層深刻になっている課題として、資料の散逸があります。被爆者組織が解散したり、あるいは被爆者の方々が亡くなったりするなかで、貴重な資料が失われはじめています。長崎においては四條知恵先生や山口響先生も所属する「長崎原爆の戦後史をのこす会」(以下、のこす会)がこの課題に取り組んで来られました。しかし、実際に資料を収集することや、それらを保管・アーカイブ化していくことについては市民団体だけの力では限界もあり、抜本的な問題の解決には至っていません。

また、今後どのように被爆の実相を伝えていくのか、いわゆる伝承(または継承)の課題もあります。長崎においては、依然として被爆の実相の伝承活動の担い手の中心は被爆者であり、非被爆者による伝承の体系的な方法論の確立、人材育成システムの構築など、課

題は山積しています。

コロナ禍の発見

世界に目を向けると、二〇二二年二月二四日にはじまったロシアによるウクライナ侵攻に見るように、核兵器が再び使用される可能性・リスクはかつてないほど高まっており、被爆地の被爆の実相を通じて、核兵器使用のリアリティを世界に伝えることが非常に重要な局面を迎えています。しかし、残念ながらコロナ禍の影響を受けて、被爆地に来る国内外からの観光客は、以前に比べると減少した状態が続いています。

こうした課題の一方で、コロナ禍によって新たな可能性も明らかになりました。それは今日のようなZOOMなどを活用したオンライン会議ツールの進歩と浸透です。コロナ禍以降、様々な現場において、こうしたツールは不可欠なものとなりました。当初は会社や学校で対面が難しい場合の対策として広がりしましたが、今となっては物理的な距離に関係なくコミュニケーションが取れるツールとして全世代に身近なものになりました。長崎においては、被爆者のオンライン証言会がすっかり定着しています。

オンラインを活用した取り組みは、コロナ禍前からも話題に挙がりつつも、世代間ギャッ

プ等により必要性の感じ方に差があったこともあり、なかなか前に進みませんでした。しかし、コロナ禍を通じてあらゆる立場の人がその必要性和可能性を知ることができたことは大きな転機と言えます。今後はオンライン発信時に活用できるコンテンツを作成することや、それらを活用して一層海外での被爆の実相の伝承が進むことが期待されます。

権利の壁

ZOOMなど、オンラインでの対話型学習の進歩とともに、ニーズが高まっているのが、オンライン上で閲覧できる資料や教材です。そしてこのオンラインでの資料や教材を取り扱う際に考えなくてはならないのは、著作権や肖像権など権利の問題です。例えば、長崎祈念館では、一九九五年度に国が実施した被爆者実態調査で全国から寄せられた体験記をまとめた証言集「(通称)黒本」が保管されていますが、閲覧は館内に限定されており、オンラインでの公開には新たに承諾書を取り直さなくてはならないというハードルがあります。今後、オンラインの発信をすすめるなかでは、オンライン発信を前提に追加の資料収集・証言の聞き取りを行ったり、可能な範囲で既存の証言の権利関係を本人や遺族に相談したりすることも必要になります。

事業の内容

こうした現在の課題と気付きをふまえて、二〇二一年度共同事業は長崎祈念館からRECNAへの委託事業として始まりました。

長崎祈念館は、原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律(以下、被爆者援護法)第四一条に基づき、国が原爆死没者の追悼と世界恒久平和を祈念するための施設として二〇〇三年七月に開館しました。施設内には追悼空間に加え、被爆証言などの資料を閲覧するコーナーもあります。

RECNAでは、長崎ユース代表団の育成や国内外で軍縮教育を担ってきた中村桂子先生、写真測量とリモートセンシングを専門にする全炳徳先生、そして私の三人を中心にこの事業を担当しています。

事業は大きく三段階あります。まずは、「被爆の実相」について追加調査を実施すること。その調査した内容をもとにオンライン・デジタル化教材を作成すること。そして、その教材を使って広島市・長崎市が行う「広島・長崎講座」の公認校をはじめとして、国内の学校現場での教育実践をすることです。次節からは具体的なこの間の取り組みについて紹介していきたいと思えます。

RECN Aでは具体的に二つの柱を設けて、取り組みを進めることになりました。一つ目は全先生の知見と技術（テクノロジー）を活かし、原爆投下前後の航空写真を活用すること。もう一つが、主に被爆前の日常を写した写真を収集し、活用するという事です。それぞれについては、このあと詳しくお話いたします。

2 航空写真アーカイブ

被爆前後の航空写真マップ

スマートフォンやタブレットによるオンラインマップは私たちの生活において手放すことができないツールになりました。行きたい場所に行くためのナビゲーションシステムに限らず、周辺で飲食店やパーキングを検索したり、航空写真に切り替えて町の雰囲気をつかんだりと、アナログの地図にはできないような機能を実装しています。

全先生はこうしたオンラインマップ上に、被爆前後の航空写真を組み合わせ、web上に被爆前後の航空写真マップ「航空写真アーカイブ」を作成することに挑戦しています。

Re:Earthの活用

「航空写真アーカイブ」作成にあたっては、「ナガサキアーカイブ」などに取り組まれてきた東京大学の渡邊英徳先生が、株式会社ユーカリヤと共同開発された「Re:Earth」を活用しています。Re:Earthは、位置情報を持つデジタルアーカイブを作成・公開できるサービスで、地図上に様々な情報やデータを加えることができます。「航空写真アーカイブ」ではRe:Earthを活用して、現在の航空写真に被爆前後の被爆地の航空写真を重ねて閲覧できるwebサイトを作成しました。

米軍が撮影した航空写真

今回使用する航空写真は、米軍が被爆前後の広島市・長崎市を撮影したものです。写真は、長崎だけでも被爆前(八月七日)と被爆後(九月七日)の両日合わせて一二一枚があります。最初の工程は、その複数の航空写真を大きな一枚の地図に繋ぎ合わせるといふ作業なのですが、それらの写真は衛星写真ではなく米軍航空機から撮影された写真ですから、一枚一枚に高低差があります。それらを調整しながら繋ぎ合わせる作業は、非常に高い技術を要するそうです。

被爆前後、現在との比較

航空写真アーカイブの最大の特徴は、被爆前と被爆後を比較しながら閲覧できるというところ です。航空写真を利用するわけですから、例えば山と平地の高低差によって被害が異なることや、あるいは焼け野が原になった場所が被爆前はどんな街並みだったのかなどを探ることができます。

被爆遺構の3D化

また、全先生のゼミ生が中心となって大型の被爆遺構、

被爆前（八月七日）の爆心地周辺



被爆後（九月七日）の爆心地周辺



具体的には長崎の場合は長崎医科大学や城山小学校、浦上天主堂などを3Dで作成しています。焼け尽くされた浦上にそびえ立つこれらの建物が異様な光景だったということは、被爆者の方々が多くお話しされていることでもありません。こうした当時の情景を追体験してもらおうという試みです。

フィールドワーク時の活用

航空写真アーカイブでは、ボタンを操作することで、被

3Dで作成した城山小学校



現在の爆心地周辺



爆前後に限らず、現在の航空写真を見ることができません。このアイデアを既存のフィードワークに活用すれば、現場に iPad 等のタブレットを導入することで、現在地が爆前はどのような街並みだったのか、そして原爆によってどのように破壊されたのかについて、実際に街を歩きながら分かりやすく学ぶことが可能になります。

3 被爆前の日常写真

「被爆の実相」について

被爆者援護法では、原爆が投下されたときに長崎市など一定の区間内にいた人や、原爆投下後二週間以内に被爆地付近に立ち入った人などを「被爆者」と定義しています。一方で、「被爆体験」については、この「被爆者」だけの体験のことを指しているのか、あるいは別の解釈もありうるのかという点が論点になります。このす会の新木武志さんは「被爆体験」という言葉が、主に反核運動において原爆の残虐性を伝えるための体験、つまり八月九日を中心とした体験に閉じ込められてきたことを指摘したうえで、以下のように続けます。

被爆者が放置され、差別され続けながら、生活を再建しなければならなかったことは、まぎれもなく原爆被災によって引き起こされた現実です。戦後の長崎では「被爆者」ではない者も含めて、そのような原爆が引き起こした現実との関わりのなかで生きざるをえませんでした。そのそれぞれの体験もまた原爆の「体験」です。それら原爆後の長崎で生きた体験を明らかにすることは、原爆が何をもたらしたのかという原爆の総体を明かすことです。(のこす会 2015: 7)

「被爆の実相」についてもこうした議論を継承し、時間軸・対象者・場所などを限定せず、原爆がもたらした被害の総体について見つめ直すことから議論を始めました。

これからの継承について

今回の事業のキーワードのもう一つに「伝承」があります。戦後七〇年以上がすぎ、被爆者も高齢化し、語り部も減少していくなかで「伝承」は非常に大きな課題になっています。

私は被爆三世として被爆地に生まれ育ちました。一九九二年生まれの私が子どもの頃は、

被爆者の祖父を含め親戚やご近所さんに被爆者やその当時を知る人が多くいて、被爆当時のことについて、世間話と同じような感覚で話されるのが当たり前のことでした。しかし、今となつては祖父をはじめ、そうした人たちはほとんど亡くなつてしまいました。

被爆当時と現在が離れば離れるほど、広島・長崎の出来事は「歴史」になり、自分との繋がりを見出すことは難しくなつていきます。被爆者がいない時代が間近に迫つていきます。被爆者がいない時代に生まれる次世代の人たちも広島・長崎の出来事と自分のつながりを見つげるためにはどんな工夫が必要なのかを考えることが、これからの継承を考えるうえでの課題と言えます。

被爆前の日常

これまでに触れた問題意識もふまえて、今回私たちが焦点を当てたのが「被爆前の日常の暮らしが分かる写真」です。被爆前の被爆地の様子については、証言のなかで被爆者自身が口頭で説明してくれることもありました。しかし、今後、被爆者がいなくなる時代のことを考えれば、被爆による破壊の影響を写す被爆後に限らず、被爆前の写真が被爆の実相を伝えるうえでも重要な資料になります。

被爆前の写真のなかでも日常に焦点を当てたのは、継承を考えるうえでのアイデアです。例えば、被爆の実相について最も学ぶ機会の多い小・中・高校生が、被爆前の子どもたちがどんな学校生活を行っていたのかを写真を通じて知ることができれば、今の自分たちとの共通点を発見し、自分ごととして考えるきっかけになるかもしれません。

被爆前の長崎の写真

被爆前の長崎を写した写真は公的機関には十分に残されていません。当時は要塞地帯法で、軍事施設の周辺では要塞司令官の許可なしに測量や写真撮影、スケッチなどが禁止、制限されていました。戦前の長崎は三菱の軍需工場など軍施設が密集していたこともあり、戦前の写真は極めて少ないと言われています。

原爆資料館には原爆直後の写真などは多く保管されていますが、原爆との関係性が特に深い場合を除いては被爆前の写真はあまり保管されていません。長崎には長崎歴史文化博物館もあります。出島とかグラバー園といった開港史にまつわるような資料が収集対象の中心であったこともあり、大正から昭和にかけての写真はほとんど保管されていないようです。

一方で、長崎では、日本において写真術を広めた上野彦馬がいたこともあって写真を写

真館で撮ること、あるいは裕福な家庭はカメラを持つことが一定のステータスになってきたようです。つまり、公的機関に残された写真は多くないものの、家族写真であれば各家庭には眠っている可能性が高いのです。また、こうした個人宅に眠る貴重な写真が、被爆者が亡くなるなかで、何の写真か、誰が写っているのか分からないということでも処分されるケースが増えていることも分かってきました。

そこで今回、既存の各施設に残る写真を活用するにとどまらず、この事業を通じて各家庭などに眠る写真を募集することにしました。

写真収集

写真募集は、二〇二一年七月末から開始しました。これまでに二〇名の方から六〇〇〇枚以上を提供いただいています。これらの写真は全部スキャニングし、デジタルデータとして保管しています。

呼びかけ時のポスターに使用した写真は、いずれも被爆前の長崎で撮影されたものです。下の右から二番目にある駅のホームの写真は、浦上駅のホームである可能性が高く、大変貴重な写真です。それ以外の写真についても、服装などに違いはあっても、子どもたちの

表情や、集合写真を撮るときのポーズなど、今を生きる同世代の子どもたちの写真との共通点がいくつも見ることができます。

被爆前の写真募集のポスター
(下右から2枚目が駅の写真)

被爆者が生きた長崎を残したい

被爆前の長崎の街並みや人々の様子がわかる写真を探しています。

長崎大学核兵器廃絶研究センターと国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館は、被爆前の長崎の様子をとらえた写真を探しています。「あの日」の前、長崎の人々はどんな日常生活を過ごしていたのか。証言と写真を組み合わせることで、よりリアリティのある伝承事業に取り組みます。

集中募集期間 2021年7月28日～年内 (※その後も随時受け付けます)

お問い合わせ
長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA) 担当: 林田
電話: 080-8040-3656 ※できない場合、折り返し連絡いたします
メール: hayashida-m@nagasaki-u.ac.jp
F A X: 095-819-2165

詳しくはこちら

企画: 長崎大学核兵器廃絶研究センター / 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

収集した写真の活用方法ですが、現在作成中の特設ホームページ内でアーカイブとして公開していきます。一つの家で数百枚の写真を提供してくださる方もいらっしゃるのですが、全てを公開するというのはなかなか難しいかもしれませんが、厳選しながら一枚でも多くの写真を公開できるように準備しているところです。

カラー化について

現在、パソコンやタブレットを用いれば、専門的な技術がなくても、モノクロの写真をAIの判断で色付けすることができます。カラー化は、前節でも紹介した渡邊先生と現役の東京大学生の庭田杏珠さんが「記憶の解凍プロジェクト（AIによるモノクロ写真のカラー化）」として取り組まれてきました。庭田さんは写真の提供者や被写体の方とコミュニケーションをとりながら、AIだけに頼らず手作業で当時の色に近づけていく作業を丁寧に行われました。その過程のなかで、「この時はこんな会話をした」と写真にまつわる七〇年以上前の記憶が蘇ることから、記憶の解凍というプロジェクト名がつけられたそうです。

私自身、庭田さんたちがカラー化した写真を通じて、戦前に対するイメージが大きく変わりました。これまで戦前と現在の違いを学ぶような機会は多くあり、それは貧しさや自

由が奪われる戦争に対する危機意識へと繋がってきたわけですが、その一方で共通点に目を向けることがなくなってしまう、現在とは全く異なる時代の出来事と感じていたことに気づかされました。

しかし、このカラー化はあくまでAIの学習記憶に基づく予測にすぎないので、当時の再現ではありません。また、注意書きがなければ当時もカラー写真が当たり前のようであったと若い世代が誤認してしまうことにもつながりかねません。実際にカラー化するうえでは、提供者との慎重なコミュニケーションも当然必要になってきます。

カラー化には、こうした論点もありますが、服装や表情などがより鮮明になるため、今との共通点を見つけやすくしたいと目的を絞った場面では、今回のプロジェクトでも活用したいと考えています。

動画「写真は語りかける」

また、写真を活用したコンテンツの制作にも取り組んでいます。その一つが動画作成です。動画は、「広島・長崎講座」や被爆地への修学旅行など、これから被爆の実相を学ぶ際のイントロダクションとして流せるものがつくれないかということで作成しました。作成

は、私と中村桂子先生が担当しました。

動画は、収集した写真をベースに、ある一つの家庭に焦点を当てたロングバージョンと、様々な家庭の暮らしを並べたショートバージョンの二種類を、日英の字幕を付けて作成しました。どちらも被爆前の日常の様子を伝えるもので、八月九日のことを学ぶ前に見ることで、原爆が奪ったものを想像するためのきっかけをつくることを目的としました。

ロングバージョンは、長崎に実在した「ある家族の物語」であり、写真の寄贈主である嘉宏よひろさんの一人語りという形をとっています。戦後生まれの嘉宏さんには「会ったことのない」兄姉がいます。当時の家族は祖父、父母、五人の姉、二人の兄の一人がいましたが、原爆によって父と一人の姉を除く家族の命が奪われました。嘉宏さんは、戦後父が再婚して生まれた子どもで、原爆で奪われた兄弟や祖父には会ったことがありません。現在は父も姉も鬼籍に入ったため、戦前の家族の思い出を語るのは、父が趣味として撮っていた数多くの写真のみになりました。嘉宏さんは写真募集の記事を見て「自分の兄弟たちが生きていた証を残したい」と連絡をしてくださりました。動画は、嘉宏さんの境遇と出会うことのなかった兄弟たちを想う気持ちをスライドショー形式で流れる当時の写真に載せています。

スライド教材

大学も含めて、現在の学校現場では、パソコンやタブレットが一人一台必須となりました。こうした学校現場でも使いやすい教材として作成したのが「スライド教材」です。

今回収集した写真のなかで、単体での資料的価値が高いものは一部であり、提供者やその被写体の証言と組み合わせる必要があるものがほとんどです。動画は優れた教材ですが、写真一枚一枚をじっくり見せることには向いていません。そこで、一枚の写真を通じて様々なことを感じ、学べるコンテンツとしてスライド教材を作成することになりました。

すでに公開しているスライドの一部を紹介いたします。これは、被爆時に鎮西学院中学校に通っていた城崎尚道さんの写真と証言を元に作成しました。写真に

スライド教材「被爆前の長崎の日常 当時の学生の暮らし」より



は、国旗や服装など現在と違う部分もありますが、リラックスした表情や同級生たちとポーズをとっている様子など、現在の学生と同じような部分を読み取ることもできます。また、証言では、ミッシェンスクールならではのであるミサのワンシーンについて、学生らしい思い出を紹介しました。

次のスライドは、長崎の中心部エリアで生まれ育った三瀬清一朗さんの写真と証言をもとに作成しました。三瀬さんが生まれたのは昭和一〇年、当時の長崎市の人口はこの年の国勢調査によると約二二万人で、全国一〇位の比較的大きな都市だったことが分かります。写真に写る商店街のにぎやかな様子を見ても、長崎がどれだけ豊かな町だったのかというのを想像することができるとおもいます。また、三瀬さんの家庭が裕福だったこともありすが、

スライド教材 被爆前の長崎の日常 「長崎中心部エリアの暮らし」より



1930年代後半（昭和10年代前半）撮影（三瀬清一朗氏提供）
高から様、三瀬さん、母、弟

カメラを持っているのが貴重な時代ですが、父はドイツ製のカメラを持っていました。うちのあたりはかなり賑やかでしたよ。

姉が乗っているのはスケートと呼んでました。今で言うキックボードですね。

当時としてはかなり透湿なおもちゃでした。



1933（昭和8）年撮影（三瀬清一朗氏提供）
本人撮影、撮影（1932年）に生まれた三瀬清一朗の幼

1 長崎中核、通りを行きかか3人から四五人のにぎわいがみえる。三瀬さんが生まれた1930（昭和10）年、長崎市の人口約21万人、全国で10位の都市だった。

2 三瀬さんは7人きょうだいの2番目、昭和時代の前半、労働力増強を促される人口を増やそうと、国を挙げて政策が展開された。「度々よ、種中せよ」といったスローガンまで登場。7人きょうだいは珍しい人数ではなかった。

キックボードに乗る姿は私も衝撃でした。

今後は集まった写真をもとに、戦後の復興に関するスライドなどの数を増やしていく予定です。

航空写真アーカイブとの組み合わせ

また、スライド教材と航空写真アーカイブの連動機能もホームページに実装予定です。教材に写る写真がどこで撮影されたのか、航空写真アーカイブに登録することで、写真に写る場所がどのあたりにあり、被爆によってどんな影響があったのかを調べることができません。

肖像権と著作権について

ここまでに紹介した教材は、いずれも教育目的であれば誰でも自由に利用できる状況を目指して、著作権や肖像権など権利関係の調整を進めているところです。調整にあたっては、こうしたデジタルアーカイブの権利関係の論点について議論を深めている「デジタルアーカイブ学会」から非常に多くの示唆をいただいています。提供者の方と相談しながら、

研究や平和学習の発展のためであれば、預かった資料や写真を誰でも使用できる状態を目指したいと思います。

4 空白を埋める

学生たちからの反応

この間、作成した教材を何度か授業で使い、学生たちからの感想をもらっています。感想は、教材改善にむけたフィードバックとして集めたものですが、参考として一部紹介いたします。

感想を読みながら見えてきたのが、「何を伝えるのか」という伝える内容だけでなく、情報の受け手となる学生たちが想像する時間や機会をつくることが重要であるということです。この気づきから、特設ページで教材を配置する際に、授業で使用する際の時間配分などを記した参考マニュアルも合わせて案内できるように準備を進めています。

空白を埋める

この間の取り組みをふまえた気付きを、本日のシンポジウムのテーマと絡めながら少し

学生の感想

- 航空写真アーカイブを通じた地形による原爆被害の考察には興味を持った
- 戦時中の学生の写真を見て、今と変わらない少年たちの無邪気さが伝わった
- 戦時中も英語の教育があったことに驚いた
- 平穏な暮らしを学んだからこそ、戦争の悲惨さがより鮮明に感じられた
- これまで原爆で亡くなった方の写真を見てその残虐性を理解できても、自分の問題とは感じなかった。でも被爆前に生きた人たちのことを知ったことで、自分の家族がこうなったらどうしようということを考えるようになった
- 今まで当時の写真を見ても背景も暗くて、悲しい感じがしていたけど、カラー化したことで太陽の下で元気に暮らしていたことが知れました
- 自分のなかにある戦争に対する固定概念とのギャップにびっくりした

だけお話したいと思います。今回「戦争の記憶——ヒロシマ／ナガサキの空白」というタイトルから非常に多くの示唆をいただいています。シンポジウムの主催者の一つである中国新聞社はこれまで「ヒロシマの空白」として、原爆供養塔に安置された引き取り手のない遺骨と遺族を結びつける取り組みなどをしてこられました。ヒロシマ平和メディアセンターの金崎由美センター長はこの一連の取り組みについてこのようにまとめています。

取材や写真収集を通じて「空白」を埋めようとする記者たちの努力に通底しているのは、原爆が強いた悲惨を「仕方ない過去」と見なすことへのあらがいであり、一人一人の生きた証を刻むことへのこだわりだ。（中国新聞社報道センター 2021: 3）

この間の共同事業での取り組みは、まさにこの「空白を埋め」ようとする取り組みであったと感じています。数字だけでは見えてこないけれど、亡くなった人たちには一人一人の名前があった。私という存在が、数字の「一」としてカウントされることへの違和感と同じような感覚を本来は原爆で亡くなった人や、傷ついた人たちにも感じなくてはならなかったのです。

原爆は時間軸においても範囲においても私たちの想像をはるかに超える被害をもたらしました。想像を超えた被害であるからこそ現実のものとは思えない、あるいは自分ごととは思えないという状況になってしまいます。実際、被爆証言を聞いたあとに、学生たちから「映画の話を聞いているようだった」という感想を聞くというのはよくあることです。

しかし、先に紹介した感想に見られるように、原爆の被害にあった方々の人生を具体的に見たり想像することができる教材は、学生たちが自分との繋がりや原爆に対するリアリ

ティー(現実性)を感じることに結びついていきました。

今後に向けた課題

現在、戦後最も核兵器の使用のリスクが高まっていると言われています。空白を埋め、原爆によって亡くなった人たちの生き様をより具体的に伝えていくことで、自分と当時を重ねて想像する人が増えることは、ヒロシマ・ナガサキに次ぐ第三の被爆地が生まれることが何を意味するのかを考えるきっかけにつながります。今後は教材を多言語化し、世界の人たちも自分ごととして捉えることのできる教材を作ることを通して、軍縮教育にも繋げていきたいです。

紹介したコンテンツについて

本日紹介した各コンテンツについては、現在作成中の特設ページで閲覧できるようにあります。本稿が出版される頃には、公開されているかと思しますので、RECNAのホームページからアクセスしてください。今回のプロジェクトを通じて公開した資料や教材がヒロシマ・ナガサキの「空白」を埋める一助となれば幸いです。

追記 本稿は、二〇二二年七月一日に開催された広島市立大学広島平和研究所、中国新聞社、RECNA共催のシンポジウム「戦争の記憶——ヒロシマ／ナガサキの空白」での発表内容を再構成し、加筆・修正したものです。

《参考文献》

中国新聞社（二〇二二）『ヒロシマの空白 被爆75年』中国新聞社・ザメディアジョン

長崎原爆の戦後史をのこす会（二〇一六）『原爆後の七〇年 長崎の記憶と記録を掘り起こす』長崎原爆の戦後史をのこす会

長崎原爆の戦後史をのこす会（二〇二二）『原爆後の75年 長崎の記憶と記録をたどる』書肆九十九
庭田杏珠・渡邊英徳（二〇二〇）『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』光文社

《より深く知るために》

長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館「被爆前の日常アーカイ

ブ」ホームページ（<https://dl-archive.jp/>）